

使役動詞 (V-(サ)セル) の語彙的・文法的な一単位性

早津恵美子

キーワード：使役動詞、単語と文、単語つくりと形つくり、品詞（部品）と文の成分（部分）

要旨

動詞 (V) と助辞 (- (サ)セル) からなる使役動詞 (V-(サ)セル「運ばせる、食べさせる」) は、基本的には発話のつど話し手によって作られるものであり、動詞のひとつの形態論的な形であってレキシコンの要素ではない。しかしながら、「(パイプを) くゆらせる」のように現代語に V が不在のもの、「(容疑者を) 泳がせる」のように V はあるもののその語彙的な意味と -(サ)セルの文法的な意味からは推測できない独自の語彙的な意味とその反映としての文法的な性質をもつものもある。こういった V-(サ)セルは、語彙的・文法的な一単位をなす独立の単語としての既成性を持ちレキシコンの要素となっている。本稿では、文との関係で V-(サ)セルにそなわる 2 つの側面—レキシコンの要素としての既成性と文の構文機能的な単位としてのアクチュアル性—の性質を具体的な例を通して考察することによって V-(サ)セルの上述の性質を明らかにした。

1. はじめに 一文との関係でみた単語の 2 つの側面—

単語は言語における基本的な単位であり、単語を組み合わせて作られる文は言語活動の最小の単位である。われわれは言語によって何かを描写したり、相手に何かを尋ねたり、相手に動作を要求したりするとき、その言語にすでに用意されている単語のなかからその場その場の必要に応じて適切な単語を選び、それを当該言語の文法にのっとって組み立てて、描写や尋ねや動作要求などが適切に表現される文をつくり、その文によって言語活動を行う。次の a の単語をくみあわせて、ある事態を描写する b の文を作るのもそのひとつである。

(a) 単語：ケーキ 花子 きノウ 食べる 甘い たくさん

(b) 文：きノウ花子は甘いケーキをたくさん食べた。

したがって、単語には文との関係でみたとき、次のような 2 つの側面をみとめることができる。ひとつは、それ（単語）を組み合わせて文を組み立てる材料すなわち部品としての側面であり、いまひとつは、できあがった文の中で一定の構文的な機能をはたす成分すなわち部分になるという側面である。上の a の単語を一定の文法（単語を使って文を組み立てるための構文論的・形態論的なきまりの総体）にのっとって組み立てて b の文を作るというのは《部品》としての側面が発揮されている。そして、文の中でそれぞれの単語が下の c に示すような機能（主語、述語、補語、……）をはたしているというのは、単語の《部分》としての側面が発揮されている¹。

¹ この第一の側面のもつ性質によって単語を分類したものが「品詞」であり、第二の側面の性質によって構文的な機能のみとめるのが「文の成分」であるが、日本語の文法用語として広くみとめられているこの 2 つは、英語の用語としてはいずれも「parts of speech」となる。

(c) きのう 花子は 甘い ケーキを たくさん 食べた。
 状況語 主語 連体修飾語 補語 連用修飾語 述語

部品としての単語は語彙的な単位であり、それぞれの言語において命名単位・記憶単位としての既成性・所与性があり、レキシコンの要素をなしている。一方、部分としての単語は構文機能的な単位であり、具体的な文のなかでアクチュアルなものとして文の直接的な構成要素をなす。

このように、一般に単語には部品としての性質と部分としての性質がそなわっている²。では、動詞 (V) に -(サ)セルのついた使役動詞 (V-(サ)セル; 運ばせる、食べさせる³) については、部品性・部分性はみとめられるのだろうか。本稿ではこのことをめぐって考えてみる。V-(サ)セルの部品性と部分性について考えることは、V-(サ)セルの語彙的・文法的な一単位性、そして単語性を考察することにつながる。

2. 使役動詞 (V-(サ)セル) の部分性と部品性

V-(サ)セルの部分性と部品性を考えると、まず、《部分 (成分)》としての側面は使役動詞全体が発揮しうるといえる。ただ、単独で文の要素となりうるのは述語になる場合にほぼ限られ、それ以外の要素 (主語、補語、修飾語など) になるのはいったん句を構成してからではある。

(1) 「後輩に荷物を運ばせる」

述語

(2) 「子供を学校へ通わせるのは親の義務だ」 「学生を帰宅させることを決める」

主語

補語 (直接目的語)

「子供に読ませる本」 「子供にリュックを担がせて送り出す」

連体修飾語

連用修飾語

一方、《部品 (材料)》としての側面は、V-(サ)セルすべてに備わっているとはいいいにくい。V-(サ)セルには、発話の際にそのつど V と -(サ)セルを組み合わせるという面が強くなり、その点で既成性が低く非語彙的である。次の (3) の「運ばせる、洗わせる」等は発話に先立って既成のものとしてレキシコンに存在していたとは考えにくい。

(3) 「太郎はいつも後輩に荷物を運ばせる」 「ときどき子供に食器を洗わせる」

「きのうは学生を早めに帰宅させた」 「新入生に難しい専門書を読ませる」

しかし、「知らせる」「聞かせる」のように、既成性が高くレキシコンの要素となっているように感じられるものもある。次の「知らせる」「聞かせる」を「知る + -(サ)セル」「聞く + -(サ)セル」のようにとはとれないだろう。

² このことについて宮島 (1983) に広い観点からの説明がある。

³ 「使役動詞」として、「文法的使役動詞」(「運ばせる、食べさせる、帰らせる、固まらせる」のような V-(サ)セルの形の動詞) と「語彙的使役動詞」(「こわす、曲げる、帰す、固める」のように、物に働きかけてその変化を引き起こす (cause) という語彙的意味をもつ他動詞) をみとめる立場もあるが (諸説については早津 2016 : p.4 参照)、本稿で「使役動詞」というのは前者についてである。また、V-(サ)セルという形 (運ばせる、食べさせる) に対して V-(サ)スという形 (運ばす、食べさす) が用いられることがある。両者の違いはしばしば論じられており、たとえば青木 (1977) は「「せる」型が頻用され、一語意識が強くなると五段活用の「す」型に転ずる傾向はある」としているが、種々の研究においても両者の違いは必ずしも明瞭になっていない。本稿ではまずは V-(サ)セルの形を対象にしている。

(4) 「出発時間をみんなに知らせる」「孫たちに昔話を聞かせる」⁴

また次のように「知らせる」「聞かせる」は、大部分の V-(サ)セルと違って謙譲語としての「オ～スル」の形を自然な表現として使うことができ、形態論的な性質としても独立の他動詞に近いことがうかがえる⁵。

(5) 「社長に会場をお知らせする」「先生のお好きなショパンをお聞かせする」

(6) 「?社長をソファにお座らせする」「?先生に広い部屋をお使わせする」

おそらくこういった性質のため、「知らせる」「聞かせる」はほとんどの国語辞書に他動詞として立項されている。

また、「もたせる」は下の (7) の場合には、発話の際に「もつ」と -(サ)セルから作られると思われ非語彙的だが、(8) のように使われる種々の「もたせる」はすべてが非語彙的とはいいいくそうである⁶。

(7) 子供に壺を両手でしっかりもたせる 子供が壺を両手でしっかりもつ

(8) 「嫁ぐ娘に桐箆笥をもたせる」「恋人に気をもたせる」「計画にゆとりをもたせる」

「欄干に身をもたせる」「壁に銃をもたせる」

そして、「もたせる」以外の V-(サ)セルにも、既成性の低いものから高いものへの段階性がありそうであり、もちろん一直線上に並ぶものではないが、次の諸例のうちでは後ろにあげた V-(サ)セルほど既成性が高そうに思われる。

(9) 運ばせる、洗わせる、作らせる、書かせる、歩かせる、……、読ませる、……、
走らせる、泳がせる、……、忍ばせる、……、握らせる、……、もたせる、……、
合わせる、聞かせる、知らせる

このようにみえてくると、V-(サ)セルの中には、発話の際にそのつど V と -(サ)セルから作られる既成性の低いものだけでなく、V-(サ)セルの形で部品（材料）としてレキシコンの中に位置づいているものがあるのではないかと思われる。

3. 使役動詞 (V-(サ)セル) の《部品》性

この節では V-(サ)セルの部品としての側面をめぐって考えてみる。それにさきだち、V-(サ)セルによる表現には原動詞 (V) による表現と構文的・意味的に対応するものとそうでないものがあることをまず 3.1 節で確認しておく。

3.1 V-(サ)セル表現に対応する原動詞表現があるか否か

V-(サ)セルには発話の際にそのつど作られる分析性の明瞭な V-(サ)セルが多く、V-(サ)セル表現にはその V による原動詞表現が自然なものとして対応することが多い。先に例 (9) としてあげた V-(サ)セルについて最初の 2 つの例について確認すると次のような関係である。

⁴ ただし「聞かせる」でも、「教師が生徒に命じて、英会話の CD を毎日 1 時間ずつ聞かせた」といった場合は「聞く +-(サ)セル」という分析性が認められ、非既成的である。

⁵ 「知らせる」「聞かせる」のこのような性質についての詳細は早津 (2016: 第 11 章) を参照。

⁶ これらのうち「気をもたせる」はこの形で慣用句になっている。また「壁に銃をもたせる」は「凭せる」という漢字表記がなされることがあり、一単位性の意識がうかがえる。「もたせる」のこのような性質についての詳細は早津 (2016: 第 10 章) を参照。

(9') 太郎はいつも後輩に荷物を運ばせるついつも後輩が荷物を運ぶ

ときどき子供に食器を洗わせるつときどき子供が食器を洗う

これらの V-(サ)セルが表しているのは、V (運ぶ、洗う) の語彙的な意味と、-(サ)セルの文法的な意味 (“動きのひきおこし”) とを合わせたものである。つまり、V-(サ)セルは V の文法的な派生形式⁷すなわち語形のひとつであり (「運ばない (否定)、運ばせる (使役)、運ばれる (受身)、運び (中止)、運びます (丁寧)、運んだ (過去)、運ぼう (意向)、運べば (仮定)、運べ (命令)、……)], 既成性をもったレキシコンの要素とは考えにくい。

ところが、形態的には V と -(サ)セルからなる V-(サ)セルであっても、対応する原動詞 (V) が現代語で使われていない (すなわち現代語のレキシコンの中に存在しない) ものがある。この場合、V-(サ)セルがこのままの形で既成品としてレキシコンの要素となっていると考えられ部品性が高い。

(10) 「パイプをくゆらせる (*くゆる)」「相手に本心をけどらせる (*けどる⁸)」

また、対応する V 自体が現代語に存在する V-(サ)セルであっても、当該の V-(サ)セル表現に対応するものとしては V 表現が不自然なものがある。たとえば、「泳がせる」「走らせる」は下の (11) (12) のように、a の V-(サ)セル表現に対しては対応する V 表現が成り立つが、b の V-(サ)セル表現に対しては V 表現が不自然である。

(11) 「泳がせる」

-a 園児たちをプールで泳がせる (つ園児たちがプールで泳ぐ)

-b 警察が容疑者を泳がせておく (つ? 容疑者が泳ぐ)

(12) 「走らせる」

-a 子供を公園まで走らせる (つ子供が公園まで走る)

-b1 太郎が本棚にさっと視線を走らせた (つ? 本棚にさっと視線が走った)

-b2 花子は病院までタクシーを走らせた (つ? 病院までタクシーが走った)

こういった場合、「泳ぐ」「走る」という動詞はもちろんレキシコンの中に存在するが、それとともにそれぞれの b の用法として使われる V-(サ)セル (泳がせる、走らせる) もレキシコンの中に存在していると考えられそうであり⁹、これらの V-(サ)セルは既成性が高い。

このように V-(サ)セルによる表現のなかには対応する V 表現が自然なものとはそうでないものがある。このことを確認したうえで以下の考察にすすむ。

3.2 V-(サ)セルの語彙的意味の一単位性

前節でレキシコンに存在しているのではないかとした V-(サ)セルは、V の語彙的な意味と -(サ)セルの文法的な意味との組み合わせではない独自の語彙的意味をもっている。「泳がせる」「走らせる」は小型の国語辞書にも V (泳ぐ、走る) とは別に立項されていることが多く、(11) b、

⁷ 石井 (2002:pp.32-33) では「咲かせる、咲かれる、咲かない、咲きます」などが「文法的な派生語」とされている。

⁸ 現代語の「けどる」はこのままの形で使われることはほとんどなく「けどらせる」あるいは「けどられる」として使われるのがふつうである。

⁹ それぞれの b における用法は a の用法からの比喩的な拡張ともいえるが、その拡張された意味としての「泳がせる」「走らせる」はかなり既成性が高いということである。

(12) bにあたる意味としてたとえば次のような語釈がなされている(『新明解国語辞典(第六版)』2005三省堂、収録語約75600項目。次の語釈中の〔〕()は原文のままである)。

(11') bの「泳がせる」:〔犯罪の被疑者などから、さらに証拠を集めるなどのために〕(警戒心を起こさせないようにして)自由に行動させる。

(12') b1の「走らせる」:走って行かせる¹⁰。

b2の「走らせる」:滞ることなく、次から次へと(さっと)動かす。

ほかにも、「ちらつかせる」は中型辞書である『精選版日本国語大辞典(初版)』(2006小学館、収録語約30万項目)には「ちらつく」とは別に立項されており、2種の意味と例が示されている。

(13) 「ちらつかせる」:①ちらりちらりと見せる。ちょっと見せては引っ込める。

「ナイフをちらつかせて脅す」「札束をちらつかせる」

②それとなく気づかせる。ほのめかす。「別れ話をちらつかせる」

この2つの「ちらつかせる」の意味は、「朝から雪がちらついている」のように使われる「ちらつく」の語彙的な意味と-(サ)セルの文法的な意味を合わせたものではなく、「ちらつかせる」として独自にもつものである。

早津(2016:第10章)では国語辞書26種(大型1種、中型7種、小型18種)について種々のV-(サ)セルの立項の様子が調査されている。「知らせる、合わせる」はすべての辞書に、「聞かせる、もたせる」は25種に立項されている。他にも「泳がせる、おどらせる、くゆらせる、咲かせる、騒がせる、忍ばせる、戦わせる、握らせる、走らせる、光らせる」など、複数の辞書に立項されているV-(サ)セルが少なからずある¹¹。辞書での立項が語彙の意味の一単位性を必ずしも保証するわけではないが、V-(サ)セルの意味がVの語彙の意味と-(サ)セルの文法的な意味とから推測できるならば立項する必要はないので、立項されているV-(サ)セルには、何らか独自の語彙の意味がみとめられるということだろう¹²。

3.3 類義の他動詞との意味的な張り合い関係 —語彙体系の補い—

独自の語彙の意味をもつようになったV-(サ)セルには、それと言いかえられそうな類義の他動詞(-(サ)セルによる派生ではないふつうの他動詞)が存在することがあるが、それらでは表せないV-(サ)セルならではの語彙の意味をもち、それらの他動詞と意味的な張り合い関係にあることがしばしばうかがえる。たとえば次の「忍ばせる」の例はa~cいずれも「入れる」で言いかえることができ、aはさらに「隠しもつ」にも言いかえられる。しかしやはり「忍ばせる」は「入れる」や「隠しもつ」では表せない独自の意味あい(“所持してはいけない物”“人に知られ

¹⁰ 語例のひとつとして「車を走らせる [=早く行かせる]」と示されている。

¹¹ これらのうちには、和英辞典や日中辞典などに立項されているものもある。東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士後期課程の呉丹氏によると、『日漢大辞典』(2002上海訳文出版社)には、上であげたもののうち、「知らせる、聞かせる、合わせる、もたせる、走らせる、忍ばせる、握らせる、騒がせる、咲かせる」が立項されているという。

¹² 石井(1988)は複合動詞について、辞書にのるものとそうでないものとの特徴を調べたものである。そのなかで、辞書にのるものには「構成要素の意味から複合動詞全体の意味を導くことができない」「生産的でない」「意味が特殊」といった性質が、のらないものには「その構成要素から全体の意味が推測される」「要素間の意味関係がわかりやすく規則的」「生産的である」といった性質があるとされている。これは複合動詞についての傾向だが、V-(サ)セルの立項についても同様の傾向があると思われる。

ないようににする”“外から見えないように”といった意味あい)を持っており、類義の他動詞と意味的な張り合いを保った独自の単位として存在していると考えられる。

(14) 「(～ニ～ヲ) 忍ばせる¹³⁾」[vs. 入れる、隠しもつ]

-a 容疑者はバッグに六本組みのドライバーセットを忍ばせ、搭乗ゲートの手荷物検査をクリアしていった。

-b 三好さんは幼い長女の写真をいつも胸に忍ばせている。

-c におい袋をバッグに忍ばせておくとおしゃれです。

次のような V-(サ)セルにも見られる。3類に分けて例をあげ、それぞれの〔 〕内に類義の他動詞を示した。

(15) 【Vが現代語で使われないもの(先の(10)に相当)】

「パイプをくゆらせる」[vs. ふかす/吸う]「敵に本心をけどらせる」[vs. ほのめかす¹⁴⁾]

(16) 【Vは現代語で使われるが当該の V-(サ)セル表現に対応する V 表現が不自然なもの(先の(11)(12)に相当)】

「足音を忍ばせる」[vs. 小さくする/ひかえる]「{行方を/姿を} くらませる」[vs. 消す/隠す/わからなくする]「嫁ぐ娘に桐箆筒をもたせる」[vs. やる/贈る/与える]「業者に金を握らせる/つかませる」[vs. 与える/やる/わたす]「本棚にさっと視線を走らせる」[vs. やる/向ける/動かす]「野菜を熱湯にくぐらせる」[vs. 通す]「友達と文学論を戦わせる」[vs. かわす]「食物の質と種類を満足させる」[vs. 満たす]

(17) 【Vが存在し、V-(サ)セル表現に対応する V 表現もあるもの(先の(9')に相当)】

「赤ん坊にミルクを飲ませる」(コ赤ん坊がミルクを飲む) [vs 与える/やる]「全員に情報を行き渡らせる」[vs 伝える/説明する/広める]「ポケットからハンカチをのぞかせている」[vs 出している/見せている]

さらに、先にあげた(11b)「容疑者を泳がせる」と(12b2)「病院までタクシーを走らせる」¹⁵⁾や、次の「騒がせる」「あかせる」は類義の他動詞もなさそうである。

(18) 「世間を騒がせた残酷な事件」「金にあかせて買い集める」

以上みてきたような V 表現の不自然な V-(サ)セルは、レキシコンの要素として存在し、ふつうの他動詞では表せない独自の語彙的な意味をもつものとして、他動詞からなる語彙体系を豊かにしているといえる¹⁶⁾。(18)のような V-(サ)セルは、臨時的にレキシコンの要素となっているということだろうか。

¹³⁾ この「忍ばせる」は、宮島(国立国語研究所)(1972:p.685)でも「形の上からは使役的なのに、もとの動詞との対応関係が一般の規則的なものからずれていて、独立の他動詞となっている。」とされている。

¹⁴⁾ 「けどらせる」と類義の他動詞はないのかもしれない。「ほのめかす」は意志的な動作にも用いられるが「けどらせる」はむしろ非意志的である。似た意味の表現をさがすと「気づかせる」「感づかせる」のような V-(サ)セルになってしまいそうである。

¹⁵⁾ 「彼は知らせを聞いて病院までタクシーを走らせた」のように主語者が運転するのでない場合の「走らせる」には類義の他動詞はなさそうである。しかし、「走らせる」は「私は病院まで車を走らせた」のように主語者自身が運転する場合にも用いることができ、この場合は、「私は病院まで車を運転した」と張り合い関係をなす。

¹⁶⁾ 早津(2020)では、名詞と他動詞からなる連語の体系を補うものとして、名詞と V-(サ)セルからなる連語をみとめる可能性と意義について考察した。その際に早津・高(2012)での観察資料の一部分を活かしている。

3.4 V-(サ)セルの語彙的意味の反映としての文法的な性質の独自性

V-(サ)セルが独自の語彙的意味を獲得すると、その反映として原動詞とは異なる構文的な性質が生じることがある。たとえば先の(11)の「泳がせる」は、「泳ぐ」ことを引きおこすという使役動詞らしい使い方では動きの様態や距離や空間や時間を表す成分と共に起できるが、「容疑者を泳がせる」の場合はそれができない。

(19=11') 「泳がせる」

-a 園児たちを {ゆっくり / 100メートル / プールで / 寒い日に} 泳がせる

-b * 警察が容疑者を {ゆっくり / 100メートル / プールで / 寒い日に} 泳がせる

先にあげた(7)の「もたせる」も「(具体物を手で)もつ」ことを引きおこすという場合には、動きの様態を修飾する成分と共に起できるが(両手でしっかりもたせる)、「嫁ぐ娘に桐箆箆をもたせる」ではそれができない。「ちらつかせる」は「雪がちらちら降る」ことを引きおこすという場合には相手を表す「人二」と組み合わせられないが、「別れ話をちらつかせる」などはそれが可能である。

(20) 「太郎が恋人に別れ話をちらつかせる」 「相手に札束をちらつかせる」

vs. 「冷気が小雪をちらつかせる」

3.5 この節のまとめ — 単語つくりと形つくり —

V-(サ)セルの中には、現代語においてVが存在しないものや、Vは存在するものの当該のV-(サ)セル表現に対応するV表現がなりたないものがあることをみてきた。そういったV-(サ)セルは、V+-(サ)セルという分析性・透明性のある程度残しつつも、Vの語彙的意味と-(サ)セルの文法的意味(“引きおこし”)との単なる組み合わせではない独自の語彙的意味(単純な他動詞では表せない独自の意味)をもつようになり、その反映として独自の文法的性質をもつ一単位の動詞となっている。そしてそれらは、レキシコン(語彙体系)の中に既存の要素《部品》として存在し、類義の他動詞と張り合いつつ、他動詞からなる語彙体系を豊かにしていると考えられる。一方で、話し手が発話のつどVと-(サ)セルを組み合わせ作りだし、Vの語彙的意味と-(サ)セルの文法的意味とを表すV-(サ)セルもある。これらが3.1節で述べたようなVの文法的な派生形式(語形)の一つをつくる「形つくり form formation」によるV-(サ)セルであるとすれば、上のようなV-(サ)セルは、原動詞とは別の単語をつくる「単語つくり word formation」によるV-(サ)セル、あるいは「語彙化¹⁷⁾」したV-(サ)セルだといえるだろう¹⁸⁾。V-(サ)セルには前者のほうが多いが、両者は截然と区別できるものではなく段階的なものであり、また、同じV-(サ)セルでどちらの性質をもつものもある(「泳がせる」「走らせる」など)こともみた。なおこの点については、本稿の最後で簡単ではあるがあらためてとりあげる。

4. 使役動詞(V-(サ)セル)の《部分》性

先に2節で、すべてのV-(サ)セルが、句の形成を通してのものを含め、文の《部分(成分)》と

¹⁷⁾ どのような現象を「語彙化」というのかには諸説があるが(早津・中山2010参照)、V-(サ)セルが独自の語彙的・文法的な性質をもつものとなることも語彙化といえるだろう。

¹⁸⁾ 「形つくり」と「単語つくり」については鈴木(1972)、石井(2002)なども参照。

しての側面を發揮しうると述べた。ここではそのことについて具体的な例を通してもう少し考えてみる。とくに、レキシコンの要素とはいえない V-(サ)セルであっても文の部分として機能し一単位性を發揮していることがうかがえる現象を觀察する。

4.1 連用修飾成分による修飾の二面性

次の2つの文はいずれも「歩かせる」が述語として用いられており¹⁹、それぞれに「黙って」「かまうことなく」という連用修飾成分が含まれている。

(21) 若い女の監督が、様々な年格好の女の囚人たちに列を作らせて、黙って歩かせていた。
(花のある遠景)

(22) 彼らは病人でも老人でもかまうことなく歩かせ、倒れればその場で切り殺し、欠損を埋めるために畑へかけだして百姓をひっぱってきた。(流亡記)

まず、「歩かせる」の部品性と部分性を考えてみる。いずれの文でも、「歩かせる」は、「歩く」+ -(サ)セルという分析性が明瞭で、「歩く」の語彙の意味と -(サ)セルの文法的意味“引きおこし”の合わさった意味を表している。したがって既成性は低くレキシコンの要素(部品)ではないと考えられる(3.5節で述べた「形づくり」による V-(サ)セルである)。しかし、構文機能的には一単位で述語(文の成分)となっている。つまり、部品ではない「歩かせる」であっても、具体的な文の中で述語としてはたらいっており、構文機能的な《部分》性は發揮しているということである。

次に、連用修飾成分と「歩かせる」との意味的な修飾・被修飾の関係をみってみる。(21)の「黙って」は動作主体(女の囚人たち)が歩くときの様態を特徴づけているので、この「黙って」は原動詞「歩く」への修飾であり、使役動詞「歩かせる」への修飾ではないと考えられる。一方、(22)の「かまうことなく」は、使役主体(彼ら)が動作主体(病人や老人)に働きかけるときの使役主体の心理や態度について特徴づけているので、使役動詞「歩かせる」への修飾である。下の(21')と(22')における V-(サ)セルの下線が、(21')では「歩か」の部分だけに、(22')では「歩かせる」全体に付してあるのは上のような修飾関係の違いを簡略に示そうとしたものであり、後にあげる(23)～(30)でも同様である。

(21') 監督が囚人たちを 黙って歩かせる 囚人たちが黙って歩く

(22') 彼等が病人や老人を かまうことなく歩かせる 病人や老人が歩く

したがって、(21)の「歩かせる」は部分(成分)としての一単位性はあるが意味的な被修飾要素としての一単位性はないのに対して、(22)の「歩かせる」は部分(成分)としての一単位性も意味的な被修飾要素としての一単位性ももっているということである。連用修飾成分による V-(サ)セルへの修飾にみられるこのような2種の例を、早津(近刊)での挙例を中心に以下にいくつか示す。いずれも形づくりによると考えられる V-(サ)セルを述語とする使役文である。

まず、Vへの修飾と考えられるのは次のような2つの場合がある。副詞をはじめとする連用修飾成分が、動作主体(下の(23)では「佐部」)が動作をするときの具体的な様態や動作の人数、

¹⁹ 前者は主節述語、後者は従属節述語であるが、本稿ではその違いは問題にならない。

動作を行う時の気持などを特徴づけている場合 ((23) (24)) と、動作対象 ((25) での「稽古」) の量や状態を特徴づけている場合 ((25) (26)) である。

- (23) 田中正造は、……佐部彦次郎を現地に派遣して、被害の実況を詳細に調査させた。
(田中正造の生涯) ⊃佐部が実況を詳細に調査する
- (24) 「農民を自主的に動き出させる」「娘に両手で壺をもたせる」「生徒をすり足で歩かせる」、「店員を交替で休ませる」「子供を思い切り遊ばせる」
- (25) 佐助に琴台と云う号を与えて門弟の稽古を全部引き継がせ、(春琴抄) ⊃佐助が稽古を全部引き継ぐ
- (26) 「バナナを1本だけ食べさせる」「荷物を簡易包装で送らせる」「ケーキを半分に切らせる」「箱を頑丈につくらせる」

一方、V-(サ)セルへの修飾と考えられるものには次のような場合がある。副詞をはじめとする連用修飾成分が、上の場合とは異なり、使役主体が動作主体に動作を行わせるときの使役主体 (下の (27) では「幹部」) の気持ちや態度を特徴づけている場合 ((27) (28)) と、使役主体から動作主体へのいわば働きかけ動作 ((29) では「若い嫁」から「雪子」への働きかけ) のありさまを特徴づけている場合 ((29) (30)) である。

- (27) 閉会のとき楽隊が軍艦マーチを演奏しました。幹部があわてて中止させました。(光)
⊃楽隊が演奏を中止する
- (28) 「元禄の町人は競って嫡子に遊芸を学ばせた」「夫人はわざとたった2つのオレンジを店員に包ませた」「父が客に出す為に特に焼かせた茶碗」
- (29) 男の子の母である若い嫁は、たんすの中から、白粉と脱脂綿をとり出して雪子に無理に受け取らせた。(青い山脈) ⊃雪子が白粉を受け取る
- (30) 「軍が住民を強制的に立ち退かせる」「妻が夫の着物を手ずから着換えさせる」「病人においしい物をせつせと食べさせる」

以上みてきたように、形つくりによる V-(サ)セル (つまりレキシコンの要素ではない V-(サ)セル) であっても、具体的な文の中で使用されるとき、構文機能的な一単位性だけでなく、上の (22) や (27)~(30) のように、意味的な被修飾性の面でも一単位性がみとめられる例があることがわかる。

4.2 文中での機能による V-(サ)セルの使役動詞性の変容

一般に単語には、具体的な文の中で用いられるとき、それが文中で果たす機能によって、一時的に語彙的・文法的な性質が変容することがある²⁰ (川端 1958、森重 1965、奥田 1967 [1985]、高橋 1994)。

²⁰ 機能の限定・固定化が進むことによって品詞の転成が生じることもある。たとえば「きまる」のテ形である「きまって」は、「太郎は就職がきまってほっとしている」の場合には動詞としての語彙的な意味が生きているが、「試験の前になるとききまって風邪をひく」の「きまって」はもっぱら連用修飾語として機能することによって「必ず」に近い意味の副詞に転成している。多くの国語辞書に立項されており、たとえば『広辞苑 (第六版)』(2008) では“いつも必ず。いつも同じように。”という語釈がなされ、「夜になるとききまって熱をだす」という例が示されている。

- (a) ヒヤシンスは水栽培で育てる。
 (b) 七日目には、もはやこの街道に初雪をみた。(夜明け前)
 (c) 太郎は性質からいうと私より無口だった。

これらのうち (a) は、他動詞「育てる」が動作対象「ヒヤシンス」を主題（テーマ・題目）とする文の述語となり、かつ「育てる」主体が不特定者であることによって他動詞性が希薄になり、文全体として「ヒヤシンスは水栽培で育つ」というヒヤシンスの属性を述べる自動詞文に近づいている。(b) は奥田（1967 [1985]）にあげられている例であり、ここでは「述語「みる」に対応すべき主体はぼかされていて、主語は省略されている。主語のない文である。この条件のなかでは、動詞「みる」の意味は、/ある、あらわれる/にずれてくるのである」（p.14）と説明されている。そして (c) では、「いう」が〔人ハ～V-条件形、～ダ〕という判断構造の複文の条件節述語として機能し、かつ「いう」主体が不特定者であるという構造のなかで、「Nの面からいうと」が「Nの点では」という、いわば観点をひきだす後置詞になっている。

単語にみられるこのような性質（文中での機能によって品詞性や意味が変容することがあるという性質）がV-(サ)セルにもみられることがある。早津（2016：第13章、第14章、2018）で検討されている4つのタイプを簡単に紹介する。

- (31) 彼は美人画を描かせれば当代一だ。
 (32) 彼女の肌は白い陶器を思わせる。
 (33) 駅前にうまい酒を飲ませる店がある。
 (34) それはなかなか泣かせる話だなあ。

まず (31) は、使役動詞の条件形「描かせれば」が、動作主体（彼）を主題とする判断構造の複文〔人（動作主体）ハ～V-(サ)セ-条件形、～ダ〕の従属節述語として機能し、使役主体は不特定者である。このような条件のもとで、「Nを描かせれば」が動作主体の才能が発揮される領域を示す後置詞「Nにおいては/Nの面では」に近づいている。他に、「彼は酒を飲ませたら会社で一番強い」「藤高は包丁をもたせれば玄人にも及ばない」「何をやらせてもだめな人」等。また (32) の「思わせる」は〔Xハ～Yヲ思ワセル〕という〔主題-解説（テーマ-レーマ）〕構造の文の述語であり、「思う」主体が不特定者であることから、「Xは～Yを思わせる」が“Xハ～Yノヨウダ”という助辞に近づいている。他に、「春を思わせる陽気」「赤煉瓦の建物は貴族の城館を思わせる」「ごちみなさを感じさせる動き」等。

そして、(33) の「飲ませる」は、動作主体（酒を飲む人）が不特定者でテンス・アスペクト・ムードの分化もない連体修飾成分であるという条件のもとで「店」の性質について動的な特徴づけをしている（うまい酒が飲める店/うまい酒が出される店）。他に、「モダンジャズを聴かせるバー」「相生と書いてオウと読ませる町」等。そして (34) は、「泣かせる」が (33) と同様の連体修飾成分として機能し（「泣く」主体が不特定者であり、テンス・アスペクト・ムードの分化もない）、さらに「泣く」動作の空間的な特定性もないという構造の中で、「泣かせる」が「話」の性質について静的な特徴づけをしていて“感動的な/心をうたれるような”といった形容詞に近い意味を表している。他に「人をしみじみさせる文章」「玄人もうならせる声」等。

V-(サ)セルが具体的な文の中で使用されたときのこういった性質（使役動詞性の希薄化による後置詞化、助辞化、動的・静的な状態詞化）は、単語づくりによるV-(サ)セルであれ、形づくりによるV-(サ)セルであれ、V-(サ)セルが文中で一単位の《部分（成分）》として機能しているこ

とを確かにうかがわせるものである。

4.3 この節のまとめ 一要素と全体の相互規定性一

単語を組み合わせて文ができるのであるから、文の性質は材料である単語の性質によってうみだされかつ規定される。しかし一方で、できあがった文は、自らの要素である単語にはたらきかけてその性質を規定するという性質をもつ。つまり、単語が具体的な文の中で部分（文の成分）として構文論的に機能することにより、その単語の部品性（品詞性）が変容することがある。広く知られている要素（単語）と全体（文）のこのような相互規定性を、4節ではV-(サ)セルをめぐって考えてみた。そして使役動詞と使役文との間にも、やはり相互規定性があることを確認することができた。

5. おわりに

本稿では、Vと-(サ)セルからなる使役動詞（V-(サ)セル）には、「形づくり（form formation）」によるとみなせるものと「単語づくり（word formation）」によるとみなせるものがあることをみた。

○形づくり（form formation）によるV-(サ)セル：

発話のつどVと-(サ)セルを組み合わせて作られ、V-(サ)セル表現とV表現との対応関係がある。既成性はなくレキシコンの要素（部品）ではないが、構文機能的な一単位性を発揮することはでき、部分性は有する。V-(サ)セルの多くはこちらのタイプである（「運ばせる、洗わせる、書かせる、帰宅させる、歩かせる、作らせる、（小雪を）ちらつかせる、（子供をプールで）泳がせる」等）。

○単語づくり（word formation）によるV-(サ)セル：

V-(サ)セル表現とV表現との対応関係がない。語彙的・文法的な一単位性があるレキシコンの要素となっており、部品性（材料性）も部分性（成分性）もそなえている。たとえば「くゆらせる、けどらせる、知らせる、聞かせる、（姿を）くらませる、（足音を）忍ばせる、（相手に札束を）ちらつかせる、（容疑者を）泳がせる」等。

このように考えると、日本語研究における「使役」研究の性格には、形づくりによるV-(サ)セルを対象にする研究としての文法論（使役文の研究）の側面と、単語づくりによるV-(サ)セルを対象にする研究としての語彙論（使役動詞の研究）の側面とがあるということになるだろう。しばしばいわれるように、語彙論と文法論が「単語」を媒介としてつながっているとすれば、V-(サ)セルをめぐって考察する使役文の研究と使役動詞の研究は「使役」の研究としてまとまるのだろう。

最後に、国語辞書のこと、日本語教育との関りについて少し考えてみたい。日本語は形態論的なカテゴリーが発達していることが言語としての大きな特徴である。動詞に特有のものとして、使役以外に受身、可能、待遇、アスペクト、ムードの一部（命令・勧誘・意志系）などがあり、動詞・形容詞・名詞-ダに共通するものとして、テンス、ムードの一部（直説・推量系）、肯定否定、丁寧さ、中止、条件などがあり、名詞に特有のものとして格がある²¹。それぞれの語形（形

²¹ 宮島（1972：第3部1.4）はこれらを全体として指摘した早い時期のものだと思われる。

態論的な形)は、まずは形づくり (form formation) によるものである。しかしながら、ある語形が独立の単語として成立して、つまり単語づくり word formation によるものとして成立し、ときに他の品詞に転成する現象があることがあり、また、具体的な文のなかで語形なのか単語なのかが決めがたいものがみられることもある。下にいくつかの語形について、すでに単語づくりとなっていそうに思われるもの (転成が完成したものも含む) をあげたが、各類の後ろのほうにあげるものには、まだ形づくりによる語形としての性質が残っているものもありそうである。

- (35) 生まれる、恵まれる、(悲しみに) うちひしがれる、(劣等感に) さいなまれる、(雰囲気) のまれる、(勝利に) 浮かれる、(不安に) 駆られる、(人柄に) 惹かれる、焼け出される、……
- (36) つまらない²²、くだらない、(暑くて) たまらない、思いがけない、煮え切らない (態度)、やりきれない (思い)、いけない (こと)、わりきれない (気持)、(それでは) すまない、……
- (37) 絶えず、すかさず、あいかわらず、思わず、残らず、かまわず、……
- (38) すべて、概して、総じて、まして、けっして、きわめて、かねて、断じて、きまって、はたして、はじめて、まげて (お願いしたい)、すすんで (てつだう)、晴れて (卒業だ)、絶えて (なかった)、かさねて (お願いいたします)、喜んで (いたします)、かみくだいて (説明する)、とんで (帰る)、思い切って、……
- (39) 一気に、おまけに (雨も降ってきた)、道理で (変だと思った)、心から (祝う)、頭から (否定する)、一段と (すばらしい)、当の (本人)、例の (店)、……
- (40) ぜひ (行きたい)、わりあい (寒い)、土台 (無理な話だ)、いったい (どうしたのだ)、(そんなこととは) つゆ (知らず)、……

このように、V-(サ)セルに限らず、動詞や名詞にいわゆる助動詞や助詞のついた語形が、単に形態論的な形のひとつというのではなく、ひとつの独自の語、つまり、語彙・文法的な単位としての語になっている、あるいはなりかかっているものがある²³。転成が完成したものはもちろんだが、むしろそうではない、単語づくりか形づくりかが判然としないものについても、動詞や名詞の語彙的意味と助動詞や助詞の文法的な意味とからは推測しにくい語彙的意味をもつもの (それらは独自の文法的な性質ももつ) については、国語辞書に積極的に立項して説明し、日本語教育の語彙指導あるいは文法指導において意識的にとりあげるものが有効ではないだろうか。

※ 本稿はもちろん書き下ろしの文章であるが、筆者がこれまでに発表した論考のいろいろな内容にあれこれのかたちで関係している。用例の引用など直接的な関係については本文中でそのつど示したが、筆者の考察の立場や前提における重なりについては具体的に示すことがむずかしかった。また先行研究も、本稿との直接的な関係については本文あるいは注で言及し、文献を稿末のリストにあげたが、広く一般に知られていると思われる言説から学んだことについてはとくに示さなかった。

²² 工藤 (1999) には、「くだらない、つまらない」をはじめとして、ナイ形のうちに「形式上は否定であるが、意味上は肯定の派生形容詞とみななければならない」ものの例が、V-ナイだけでなく「申しわけない、だらしない」なども含んであげられている。

²³ 早津 (2001) で種々の例について検討した。

参考文献

- 青木伶子 (1977) 「使役—自動詞・他動詞との関わりにおいて—」『成蹊国文』10、pp.26-39、成蹊大学文学部日本文学科研究室
- 石井正彦 (1988) 「辞書に載る複合動詞・載らない複合動詞」『日本語学』7-5、pp.33-43、明治書院
- 石井正彦 (2002) 「日本語の形態論」『現代日本語講座 第5巻 文法』pp.22-37、明治書院
- 奥田靖雄 (1985) 『ことばの研究・序説』、むぎ書房【とくに、「語彙的な意味のあり方」(1967)、「言語における形式」(1973)、「単語をめぐって」(1974)】
- 川端善明 (1958) 「接続と修飾—「連用」についての序説—」『国語国文』27-5、pp.38-64、京都大学国語国文学会
- 工藤真由美 (1999) 「否定と呼応する副詞をめぐって」『大阪大学文学部紀要』39、pp.69-107
- 斎藤倫明 (1992) 『現代日本語の語構成論的研究—語における形と意味—』ひつじ書房
- 斎藤倫明 (2004) 『語彙論的語構成論』ひつじ書房
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高橋太郎 (1994) 『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失—』むぎ書房【とくに、「第2章 第1節 連体形のもつ統語論的な機能と形態論的な性格の関係」(1974)、「第2章 第3節 動詞の中止形(～シテ)とその転成をめぐって」(1983)、「第2章 第4節 動詞の条件形の後置詞化」(1983)】
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第1巻』くろしお出版
- 早津恵美子 (2001) 「日本語における語彙的な意味の単位をめぐって」津曲敏郎(編)『環北太平洋の言語』7、pp.219-254、文部省科学研究費補助金特定領域研究(A)『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究』研究成果報告書
- 早津恵美子 (2016) 『現代日本語の使役文』ひつじ書房【とくに、「第10章 「もたせる」における使役動詞性と他動詞性」、「第11章 「知らせる」「聞かせる」における使役動詞性と他動詞性」、「第12章 「V-(サ)セル」の語彙的な意味の一単位性」、「第13章 使役動詞条件形の後置詞への近づき」、「第14章 「感じさせる」「思わせる」の判断助辞への近づき】
- 早津恵美子 (2018) 「使役動詞「V-(サ)セル」の状態詞化—使役動詞の希薄化のひとつの類—」『形式語研究の現在』pp.235-253、和泉書院
- 早津恵美子 (2019) 「使役動詞(V-(サ)セル)の語彙的・文法的な一単位性」、シンポジウム「言語全体を基盤として語彙論と文法論の繋がりを考える—言語単位を軸として」における講演資料、2019年9月28日、中国海洋大学
- 早津恵美子 (2020) 「名詞と使役動詞(V-(サ)セル)からなる連語」『東アジア国際言語研究』1、pp.46-65、東アジア国際言語学会(旧称「国際連語論学会」)
- 早津恵美子(近刊)「日本語の使役文における副詞によるV-(サ)セルへの修飾」『日本語と中国語の副詞』pp.27-56、白帝社
- 早津恵美子・高京美(2012)『コーパスに基づく日本語使役文・他動詞文の実態』(コーパスに基づく言語学教育研究資料6)、東京外国語大学大学院総合国際学研究院
- 早津恵美子・中山健一(2010)「「語彙化(lexicalization)」について—事典類の記述の調査と日本語での言語現象」『コーパスに基づく言語学教育研究報告5 フィールド調査、言語コーパス、言語情報学Ⅱ』pp.67-85、東京外国語大学大学院総合国際学研究院
- 松本泰文(2006)『連語論と統語論』至文堂【とくに、「単語・連語・慣用句」(1995)、「なづけの単位としての連語」(2003)、「品詞と文の部分」(2005)】
- 宮島達夫(国立国語研究所)(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版【とくに、「第3部 意味とほかの性質との関係」のうち「1.3 用法の限定による品詞性の変化」、「1.4 動詞の意味と形態論的な性質」(両者が宮島達夫1994『語彙論研究』むぎ書房 pp.349-355、pp.355-364に再録)】
- 宮島達夫(1983)「単語の本質と現象」『教育国語』74、むぎ書房(宮島達夫1994『語彙論研究』むぎ書房 pp.95-112に再録)
- 森重敏(1965)『日本文法—主語と述語—』武蔵野書院

(はやつ えみこ 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授)

The Lexical and Grammatical Unity of the Japanese Causative Verb *V-(sa)seru*

HAYATSU Emiko

The causative verb *V-(s)aseru* (e.g. *hakob-aseru*, *tabe-saseru*), formed from a verb (*hakobu* ‘to carry’, *taberu* ‘to eat’) and the particle *-(s)aseru* ‘to cause’, is basically one morphological form of the verb produced by the speaker as required and is not included in the Japanese lexicon. However, there are examples like (*paipu wo*) *kuyur-aseru* ‘to have a puff calmly on one’s pipe’, in which the verb *kuyuru* does not exist independently in contemporary Japanese, or like (*yogisha wo*) *oyog-aseru* ‘to leave a suspect at large in order to maintain surveillance on his movement’, in which the verb *oyogu* ‘to swim’ exists but its combination with the particle possesses a particular lexical meaning and grammatical characteristics that cannot be predicted from the verb’s lexical meaning and the particle’s grammatical meaning. It is thought that these examples of *V-(s)aseru* are listed in the Japanese lexicon as independent words, possessing lexical and grammatical unity.

This paper elucidates the above characteristics of *V-(s)aseru* through consideration of specific examples. It observes the two aspects of *V-(s)aseru* in relation to sentences, namely its existence in the lexicon as material for a sentence and its grammatical function within a sentence.